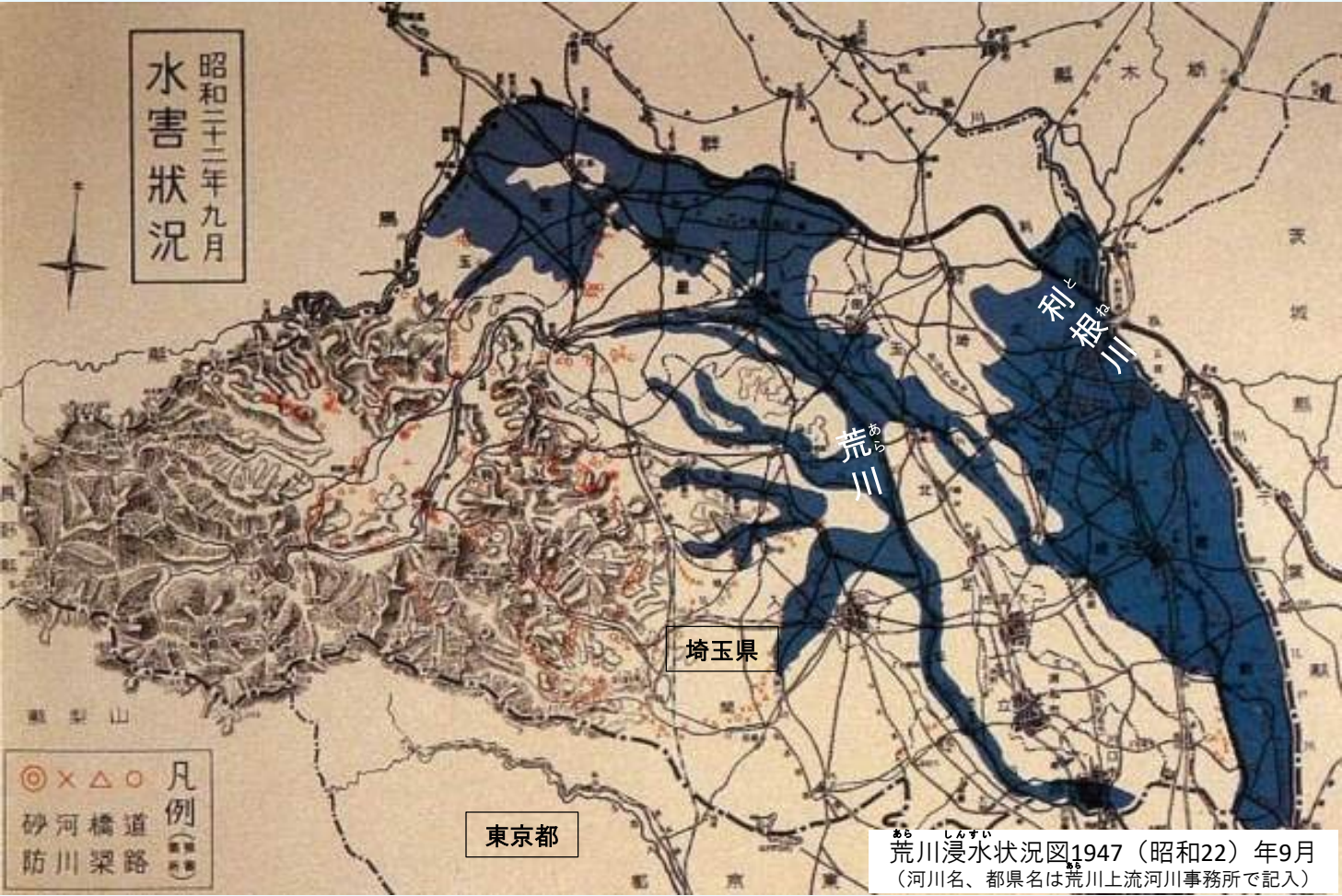


カスリーン台風

～荒川の戦後最大の大洪水～

1947（昭和22）年9月、カスリーン台風により発生した大洪水により、荒川流域に大きな被害が発生しました。



カスリーン台風による古谷村の浸水状況（現川越市）



堤防決壊地点の様子（熊谷市久下地先）

洪水の発生状況

「カスリーン台風」による大雨で発生した1947（昭和22）年9月洪水では、現在の鴻巣市で堤防が約65mに渡り決壊したのに続き、熊谷市久下地先でも約100mにわたり堤防が決壊しました。荒川から溢れ出た濁流は中小河川を次々と堤防決壊に追いやりながら元荒川沿いに南下し、17日には利根川の堤防決壊による濁流と合流して更に被害を拡大させました。最初の堤防決壊から5日目を数える20日午後には、多くの市区町村を飲み込んだ濁流は東京湾にまで達しました。

都県名	家屋の浸水(戸)		死者(人)	傷者(人)
	ゆかうえ 床上	ゆかした 床下		
東京	72,945	15,485	8	138
埼玉	44,610	34,334	86	1,394

東京都・埼玉県の被害状況

▶ 1947（昭和22）年9月洪水（カスリーン台風）

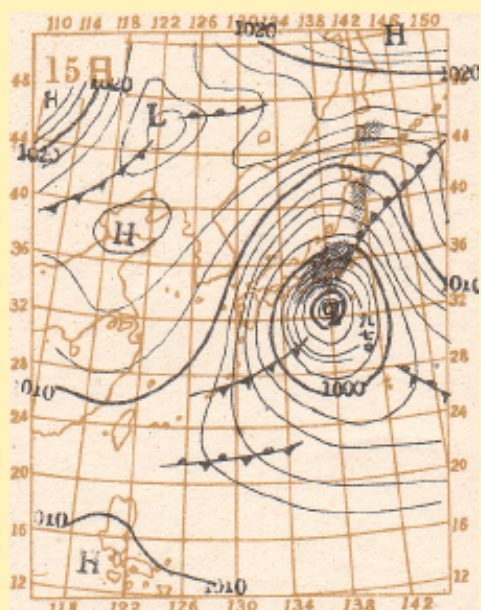
関東の西部及び北部山沿いに停滞していた前線が活発化し、秩父の日最大降水量519.7mmと現在でも秩父の観測史上最大となる数値を記録しています。台風の勢力は特に強かったわけではありませんが、いわゆる雨台風で、ゆっくりとした速度で進み、大量の水蒸気を送り込んだため大雨となりました。

荒川本川だけでなく支川でも、入間川をはじめ埼玉県内の中小河川50余箇所で決壊し濁流が各所へ流れ出しました。

入間川と荒川の合流する北側の現川島町では最大水深3m程度となりました。



堤防決壊地点の状況 1947（昭和22）年10月米軍空撮



1947（昭和22）年9月14日の天気図

▶ 昭和初期の水害

カスリーン台風に限らず昭和30年代までの台風の被害は、大洪水による死者の多いのが特徴の一つでもありました。荒川では、昭和初期の10年間に3度も計画洪水流量※を上回る大洪水が発生したことから、計画の再検討が考えられました。

1938（昭和13）年9月の洪水では、寄居地点で洪水流量毎秒5,633m³を記録しました。また、1941（昭和16）年7月には同じく毎秒6,445m³の出水があり、2度にわたって荒川で想定した洪水流量（計画高水流量※：毎秒3,340m³）を上回る洪水に見舞われました。さらに、1947（昭和22）年9月には東日本を中心に未曾有の大水害となるカスリーン台風が襲来し、この洪水でも計画高水流量を上回る流量となりました。

※計画高水流量：基本高水（流域に降った計画規模の降雨が人工的な施設で洪水調節が行われず、そのまま河川に流れ出た場合における洪水時の河川の最大流量）からダム等による洪水の調節量を差し引いた後の流量です。

コラム 台風の名前は外国人女性！？

台風は年頭から発生順に、台風第1号・第2号と名付けられていますが、昔はなぜ英語名の台風があったのでしょうか。それは、日本が1947（昭和22）年～1952（昭和27）年まで6年間にわたってアメリカの占領下にあったため、ハリケーンにならって台風にも英語名（女性名）を付けていたのです。つまりこの6年間に発生したカスリーン1947（昭和22）年、アイオン1948（昭和23）年、キティ1949（昭和24）年、ジューン1950（昭和25）年、ルース1951（昭和26）年などの台風名は番号ではなく、英語名が正式名なのです。

アクセス

決壊の碑

カスリーン台風による決壊地点に「決壊の碑」が建てられています。碑の裏面に碑文が刻まれており、被害の大きさや人々の苦闘の様子、また治水対策の重要性を後世に伝えています

交通：JR高崎線「行田駅」下車、

徒歩約3分

住所：埼玉県熊谷市久下



決壊の碑